

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00966

研究課題名(和文) 在外日本前近代史研究の軌跡

研究課題名(英文) The Academic Tradition of Reserch on Pre-modern History of Japan abroad

研究代表者

坂上 康俊 (Sakaue, Yasutoshi)

九州大学・人文科学研究院・特任研究員

研究者番号：30162275

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)： 諸外国における前近代の日本の歴史の研究はどのような継承関係を持っているかを調査した。調査の対象は、東アジア諸国は割愛し、最終的に欧米の学界に絞った。欧米諸国にあっては、幅広く言語・文学・民俗・美術等の専門分化を生み出しながらも、そこに日本の歴史そのものについての一貫した関心が見出せるからである。

調査の結果、欧米諸国の中でも、かなり学統のあり方が異なることが分かった。一つないし複数の拠点校で深化していったドイツ・オランダ(フランスもこれに近い)、外交官の関心から興り、拠点校はあるものの明確な学統を描きにくいイギリス、かなり明確な学統が継続しているアメリカとまとめることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

前近代日本史学というフィールドを設定することによって、欧米諸国における日本学の展開のバックボーンと、それぞれの相違点のある程度描き出すことができた。全体に欧米諸国において日本への関心は中国や韓国の台頭に伴って低下しつつあるとすることができるが、その中で学統を守ることができたり、あるいは途絶えていくことの背景には、日本学の発展の経緯の違いが大きく作用している面があるとともに、これに従事している研究者の置かれている立場を理解することによって、我々の良き同伴者となるべき研究者への支援、あるいは要請も効果的に行うことができるだろう。

研究成果の概要(英文)： We investigated what kinds of inheritance relationships exist between studies of pre-modern Japanese history in other countries. The scope of the survey was omitted from East Asian countries, and was ultimately focused on Western academia. This is because, while Western countries have created a wide range of specializations in language, literature, folklore, art, etc., a consistent interest in Japanese history itself can be found there. As a result of the survey, it was found that academic traditions differ considerably even in Western countries. In Germany and the Netherlands, it has deepened with one or more base schools (France is also similar), in England it arose from the interest of diplomats, and although there are base schools, it is difficult to draw a clear academic lineage, and in the United States it is quite a clear academic tradition continues

研究分野：日本古代史

キーワード：前近代 日本史 外国史研究 学統

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

昨今、欧米の日本前近代史研究者は影が薄くなりつつあり、海外でこれまで前近代日本研究の拠点だった諸大学における前近代日本史研究者(専任)の減員・不在と、研究力の凋落は憂慮すべき状態となっているという。欧米の歴史学界にあっては、日本研究から中国研究へとシフトしている点は、大勢として動かないだろう。世界における前近代日本史研究の軌跡を把握し、それぞれの個別事情を把握した上で学術研究交流・留学生交流を推進することは、将来の国益にかかわるとする観点よりはむしろ、近未来の日本史研究の豊かさを担保するものとして必要不可欠のものであり、従って本研究が掲げる在外前近代日本史研究の軌跡の追究は、喫緊の課題と言えるのである。

### 2. 研究の目的

本研究は、前近代日本史研究のグローバル化に直面していながら、海外での当該分野の研究の軌跡にあまりに関心ではなかったかという反省に立ち、諸国・地域における前近代日本史研究の現在に至る系譜を、師弟関係や研究交流といった学統的側面を軸に、研究者の置かれた状況・環境などの影響といった諸側面に留意しつつ描き出そうという試みの一つである。こういう観点に立って本研究では、海外での前近代日本史研究のこれまでの軌跡を追い、どのような問題関心に沿って研究が深められてきたのか、具体的にはどのような学問的系統・師弟関係が研究史を織り成していったのか、そしてそれはどのような外部的要因によって左右されてきたのか、更には文学や美術史など、前近代日本史の研究と密接に関わる研究分野と、諸国ではどのように交差してきたのか、これを明らかにしていくことを目的とする。なお、当初の目論見では、中国・韓国・台湾などの東アジア諸国での歩み・傾向と、欧米諸国でのそれとは相当異なった様相を示すであろうことが予想されていたが、結果的には東アジア諸国における日本研究は交流史の一環として発展してきたもので、殆どが自国史の学統の中に組み込まれていると判断されたため、本成果報告書では言及しないことにした。

### 3. 研究の方法

当初の計画では、まず現在の研究者をリストアップし、次に身近な研究者へのインタビュー、最後に著書の序文・謝辞等による確認作業、という段取りで取り組む予定であった。研究遂行上に生じたさまざまな障碍や幸運については、黄霄龍・堀川康史編『アジア遊学 289 海外の日本中世史研究』(勉誠社、2023年)に寄せたせたコラム「在外日本前近代史研究者の学統は描けるのか」に記したので贅言しない。結果的に、系譜化に際して有効だったデータは、以下のとおりである。

(1) 所属大学のホームページの中の教員の学歴・研究歴紹介。

(2) (1)に到達する最も効率的なデータベースとしての国際日本文化研究センターのデータベース(日本研究情報網 NIMOU)。ただし、(1)と(2)は、現存の、あるいは現役の研究者に限られているという難点と、大学によっては(特に日本の大学に目立つのだが)、教員の学士・修士・博士などの学位取得情報や職歴が落ちていることがあるという問題も散見する。

(3) 本来は最も効率的な方法として、諸国を代表する研究機関(大学など)の研究者へのインタビューがあり、今回もドイツ・オランダについては、その成果にかなり拠っているわけであるが、新型コロナその他の影響で十分にインタビューの機会が設けられなかった点が残念である。

(4) 国際日本文化研究センターが公開した「世界の日本学」シリーズのような学界展望は、最初に諸国における研究の成り立ちや軌跡をたどるのに役立った。『史学雑誌』『日本史研究』『アジア遊学』その他における学界展望もこれに類する価値を持つ。ただし、著者の問題関心次第で、今回のテーマにとって使えるものと使えないものがあることはいうまでもない。

(5) 全体として、wikipediaは大変役に立った。特に代表的な研究者については学歴・職歴はいうまでもなく、師弟関係まで記されてあったりするし、また訃報の類が検索に上がってくるので、系譜を追う際におおいに役立った。もちろんこれらの情報を鵜呑みにすることは本来避けるべきところであるが、今回はまず叩き台を示すことを目的としたので、よほど矛盾しなければ採用することにした。なお、google等の自動翻訳機能が、研究期間内においてすら長足の進歩を遂げたことは、まことに有り難いことであった。

(6) もちろん系譜化の先行研究は最も役立つものである。その代表例として前掲コラムでも掲げたポーラ・カーティス氏作成の系統図を挙げることができるが、当該図は1600年以前を対象とする研究者を挙げたものであり、本研究は前近代(幕末以前)を対象とするといったように微妙に対象の絞り方が異なるので、その点注意が必要であった。

#### 4. 研究成果

本来、諸国における学統図を掲載すべきであるが、あまりにも膨大になってしまう。そこで系譜自体は形を整えて法政大学の国際日本学研究所研究成果報告書『国際日本学』に寄稿することとし、ここではドイツ・フランス・オランダ・イギリス・アメリカにおける前近代日本史研究者の学統図を作りながら気づいたそれぞれの特徴をかいついで述べることにする。

ドイツでは、日本学の創始自体はそう古くはないが、ベルリン・フンボルト大学、ハンブルク大学、ミュンヘン大学、更に戦後はルール大学ボーフムなど幾つかの研究・教育拠点大学があり、ブルーノ・レヴィン、ホルスト・ハミッチュといった有力な教授たちが研究を指導してきた。現今のスタッフは、これらの拠点校を学歴、あるいは職歴の中で経巡りつつキャリアを積み重ねてきている。従って師弟関係は学歴(学士・修士・博士の各課程)に伴って変化するので、必ずしも師の研究分野を継承するというものではなく、言語・文学・民俗などの歴史学にとって周辺分野や近現代史に取り組む研究者との混合体のような組織の中で、高度に専門的な学知が蓄えられてきたという印象がある。

フランスでは、大規模な大学の改編があったためか、拠点校というものが見えにくいだが、間違いなく極東言語研究院(INALCO)が日本学へと進む学生の大きな流れを形成している。もともとは東洋学から枝分かれしてきた日本学という発生の経緯を持つが、かつては日仏会館の研究者という日本学者への登竜門があって、この在籍者が日本学のリーダーシップをとってきた。最近では優秀な博士論文に対して渋沢・クロード賞が授けられ、これによって次世代の日本学研究者の輩出ぶりが示されるというように、言わば徹底して日本学のエリートを可視化する仕組みが採られているように見受けられる。その中で前近代史については、エライユとベルナル・フランクといった両巨人のように、古典文学への関

心との響き合いが著しい。

オランダでは、前近代日本史学の拠点校としては事実上ライデン大学のみが担ってきた。遡ればオランダ商館長やその同僚に淵源を持つが、一旦は幅広い東洋学の中に位置づけられたこともあって、必ずしも日蘭交渉史に特化することなく、思想史・文化史などといった幅広い関心をそれぞれの研究者が追究している。従って研究内容の面からの学統は、描きにくいとも言える。

イギリスでは、実は学統というものがわかりにくい。そもそもイギリス人の初期の日本学者の殆どは外交官として日本に滞在した者たちであり、それぞれのキャリアを見ても大学等で教鞭を執っているわけではなかった。従って学説上の影響関係は当然のようにあったとしても、師弟関係というものが成り立ちにくかったと想像される。こうした中で第二次世界大戦を契機に、日本語の習熟を目指した組織が立ち上げられ、ここから日本学へと進む者が現れた。戦後にはロンドン大学東洋アフリカ学院 SOAS などの拠点校が設定されているが、これらから前近代日本史研究者が輩出しているとは言いがたい。英語圏ということもあって、アメリカ・カナダとの人事交流が容易である点も、研究者養成、学統の形成には不利に働いているように見受けられる。その一方で、イタリアやオーストリアなどの大学で研鑽を積んだ日本学研究者を積極的に採用しているという特徴も目立っている。

アメリカでも、基本的には第二次世界大戦が大きな契機になって日本学が盛んになったが、ここではイギリスとは異なって大きな学統樹が形成され、それぞれの世代の巨人の在籍大学が、その後も拠点校として機能してきた。すなわちハーバードのエドウィン・ライシャワー、ミシガン、イエールのジョン・ホール、スタンフォードのジェフリー・マス、ミシガンのヒトミ・トノムラ、南カリフォルニアのジョーン・ピジョーといったように、歴代の教え子たちが次々に拠点校を形づくっていったさまが顕著である。もちろん盛衰は見られるが、逆に世界中から日本史研究者を大学院生レベルで集めて教育し、学位を授けては世界中に送り込む活力を維持していると言えるだろう。

以上極めて雑駁な印象論を記してしまったので、分野によっては異論が立てられるかもしれない。こうした概観は何よりも学統図そのものからどういう情報が得られるかという視点の問題に直結しており、本研究はその学統の可視化自体を目的としたものであるから、より早い学統図の公開を目指し、その上でご批判を仰ぎながらより充実したものと編み上げていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 坂上 康俊	4. 巻 289
2. 論文標題 在外日本前近代史研究の学統は描けるか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 116-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------